

# 教 仏 名 聞

第16号

(発行日)

2012年1月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

## 《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日 午後2時始。

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日と12日午後3時始

○ 〈聖典学習会〉

毎月6日午後7時始。

○ 〈真宗入門講座〉

毎月18日午後6時30分始。

\* 8月は2日の念仏座談会と6日の聖典学習会以外は休み。

# 何を行じているか

現在アメリカ合衆国の仏教徒は約三〇〇万人で人口のほ

ぼ一%といわれている。その

他、仏教徒という自己意識は

ないけれど仏教の本をよく読

んだり講演を聴いたり、時に

は坐禅をするような人は約二

五〇万人ほどいて、さらに仏

教になんらかの影響を受けた

人は二五〇〇万人にのぼると

いわれている。

仏教徒が人口約三億のアメ

リカで一%ほどというのはま

だまだ少ないが、しかし、一

九七〇年代には二〇万人とい

われていたので、三十数年で

ほぼ十五倍になっている。ア

メリカのキリスト教徒は一九

七〇年代には人口の九十一%

であったが現在は七十六%と

減少している。ちなみに日本

のキリスト教徒は明治になっ

て布教が許可され開始されて

一四〇年ほどになるが、未だ

に日本の人口の一%で約一〇

〇万人ほどである。(しかし、

日本のキリスト教が近代日本

に与えた文化的影響は大き

い)

さてその三〇〇万の仏教徒

の内容は、百六十万人がアジ

ア系の移民に連なる人たちが

あり、一〇万人は創価学会の

会員であるといわれている。

(以上、ケネスタナカ博士の

報告による)

そして百三十万人ぐらいの

人たちがほぼ白人系の人で自

分の意思で仏教徒になった人

たちである。しかもこの人達

は裕福で教育レベルの高い人

たちといわれている。彼らが

属している仏教はほとんどチ

ベット仏教、禅仏教、そして

上座部系の仏教である。そし

て彼らの関心は、仏教儀礼や

法要に対しては乏しく、また

仏教教義よりも行(プラクテ

イス)に関心がある。(この

点で日本の仏教徒とは逆であ

る)

それゆえ初めて仏教徒同士

が会うと、「あなたは何宗で

すか」と問うのではなく「あ

なたは何を行じていますか」

と問うのだそうである。すな

わち仏教の教理よりも仏教の

行(実践)を重んじるのであ

る。

チベット仏教ではゾクチェ

ンという瞑想法があり、上座

部の仏教にはヴィーパッサナ

という行法があり、日本や韓

国の禅宗には坐禅の行があ

る。こうした実際のな「行」

に関心が深いのである。昨年

の十月に亡くなったアップル

社の創業者であったスティーブ

・ジョブズは毎朝のように日

本の禅宗の坐禅行を行ってい

たといわれている。

はもとより、仏教教義を頭で

理解することだけに力を入れ

るというのは、「救われたい

「苦しみから解放されたい」

という切実な課題にたいして

行から入るのに比してなお間

接的といわざるをえない。

すなわち彼らは仏教の行を

通して経験的体験的に仏教の

利益(効果)を身につけよう

とするのである。

このように行(実践)から

安らぎなり心の安定なりを得

ようとする態度はむしろ自然

な仏教への接近であると思

う。儀式法要に参加すること

はもとより、仏教教義を頭で

理解することだけに力を入れ

るというのは、「救われたい

「苦しみから解放されたい」

という切実な課題にたいして

行から入るのに比してなお間

接的といわざるをえない。

《真宗入門講座》

(お勤めのおけいこと法話)

毎月十八日(午後六時半始)

担当 (副住職) 土井尚存

真宗大谷派 念佛寺

(責役・総代)

土井紀明 土井眞由実

中村穂積 迫田忠夫

宮野勲 中川政二

平成二十四年元旦

謹賀新年

# 正信偈に学ぶ問答

## (二十七)

下さるのである、と聖人は仰せられるのです」

A「信心をいただくと、この世において浄土に至ることに定まった方々の仲間に入ることもできるばかりでなく、浄土に生まれ証りを開いて仏となり、他の迷える衆生を救う働きをさせていただく身となるといわれるのですね」

D「ええそうです」

A「浄土に至ると仏になるといわれるのをここでは真如法性の身になるといわれていますが、このことをどう理解したらいいでしょうか」

D「真如法性は文字からいえば、真如とは真実ありのままということであり、法性とは法（存在）の真実の本性ということでしょうから、真如法性の身とは真実そのものの身と申すのでしよう。もちろんこの場合の身は肉体の身という意味ではなく、当体と申すのでしようし、あるいは真実の（はたらき）といつてもいいのでしよう」

A「その真実の身というのをもう少し分かりやすくいつてくださいますか」

D「これを大無量寿経では（虚無の身）とも示されています。虚無とは色も形もないこ

行から仏教に入るといのは、真宗を求めるときも決して不自然ではない、むしろ自然である。悩み苦しんでいる人にまずはお念仏を称えることを勧めるといふのが、法然聖人や親鸞聖人の御教化ではなかったかと思う。「苦しかつたら念仏申せ」とお勧めになり、次に「その南無阿弥陀仏は煩惱具足のあなたを助けるという阿弥陀仏のお慈悲の誓いなのですよ」と称えているお念仏のいわれを聞かせていくというのが自然な浄土門の道であろう。故藤原正遠師が人生問題に苦しんでやっつてこられた人に対して

「阿弥陀様は（どうにもならねば、我が名を称えよ」と仰せ下さっているから、称えてみませんか」とよくお勧めになり、先生の御縁に合われた多くの方がそれによって念仏を申すようになった。

自力の念仏も他力の念仏もまずは称えた上での話である。しかも一声でも称えて「この南無阿弥陀仏様に助けられるばかり」とすつと受けとれば、それが信心であり、他力の念仏である。だから何時でもだれでも、一声でも称え

るその所に救いはすでに来ているのである。たくさん称えねば救いはない、というのではまったくない。

しかるに「称えておればいつかは助けていただけるとか「称えさえすればいいのである」というようにお念仏を救いの手段のように受けとつたり、救いを遠い未来に予定するのは、今のお助けをはねつけているのであって、そういう念仏を自力の念仏とか疑惑の念仏とかいっているのである。

お念仏の行は生涯にわたつて相續されていくものであって、それが真宗門徒の人生生活の基本である。もしアメリカで「あなたは何を行じていますか」と問われたら「日々お念仏を称えております」といえばいいのである。

しかし、その念仏は私の修行ではなく、一声一声が「汝をまるまる引き受ける」「助ける」の大慈大悲の喚び声とお聞かせいただくお念仏である。そういう意味では、ゾクチェンとか禅などの聖道門の自力の行とは違って、如来様が私の口を通して行ぜしめたもう他力の行（大行）なのである。

(了)

得至蓮華藏世界  
即証真如法性身  
遊煩惱林現神通  
入生死園示応化

(書き下し) 蓮華藏世界に至ることを得れば、すなわち真如法性の身を証せしむと。煩惱の林に遊びて神通を現じ、生死の園に入りて応化を示す、といえり。

(現代語訳) 阿弥陀仏の浄土に至れば、即刻、涅槃のさとりそのものに入ることができ。さらにまた、煩惱に惑い、生死の苦に泣いているこの娑婆世界にたち帰り、仏・菩薩の不思議な通力によって処々方々に現れ、縁に応じて種々に姿形を変えて自由自在に衆生を教化するはたらきに出ることができ、と天親菩薩は説かれました。

(語句)  
蓮華藏世界——阿弥陀仏の浄土のこと。  
真如法性の身——涅槃のさとりそのもの。

煩惱の林・生死の園——我々迷いの娑婆世界のこと。  
神通——仏・菩薩が具えている不思議な力のはたらき。六神通。

応化——相手に応じて身を種々の形に化えて現れる仏身。化身。

\*

D「前回、弥陀の本願を信じ、阿弥陀仏におさめ取られると、阿弥陀仏の説法の座に連なる人々（大会衆）の仲間に入れていただくという、そういう利益が信心には与えられる、と申しました。ここはその続きで、信心の利益は、現在に大会衆の数に入るだけでなく、第二にはこの世のいのちが終えると蓮華藏世界である阿弥陀仏の浄土に至るのであり、浄土に至ると直ちに大涅槃の証りを開き、真如法性の身となる。そして第三には煩惱の濁世に還つて衆生を自由にして教化することができ、そういう広大な利益をいただくのであると天親菩薩は仰せ

とで、虚無の身とは色もなく形もない真実そのものを体とするといえましょう。禅の優れた思想家であった久松真一

師は、仏とはホームレスセルフ、いわば形のない無相の自己であるといわれていました

が、無相の身それが虚無の身であり、真如法性の身と理解してはどうでしょうか

A 「反対に、仏ではない私たちの身は形のある身ですね」

D 「ええそうです。いわゆる心を伴った肉体の身ですね」

A 「それに対して無相の身が仏の身であるといわれるのですね」

D 「ええ、そのように理解しては如何でしょうか」

A 「形のある肉体であり自我の心を自分であると思っ

てますが、それは迷いの姿なのです

D 「ええ、そういう肉体的精神的な一つの限定された形を

自分であると思っ、それに深く執着しているのですね。そ

れゆえ苦しみや憂いや嘆きが絶えないのであると仏陀は教

えて下さり、こういう生存の形を取って生まれては死に、

死んではまた形をとってそれに執着して苦しむ、また死んではまた形を取って苦しむと

いう、それを生死流転の苦と仏教では教えて下さっています

A 「なぜ形をどこまでも取り続けるのでしょうか」

D 「それは迷いの心、いわゆる無明があるからだ」と仏陀は教えて下さいます。無明があるから行がある、そこから形を形成してそれに執着する(愛)、これを繰り返しているのだから

A 「ここでの(行)とはなんですか」

D 「仏教学者の中村元博士は行を潜在的形能力と訳しています。形(心身)を形成する潜在的な働きといわれるのです」

A 「そうすると私の身体がここに

にあるということは無明・行が原因となって、人としての

心身の形をとってきたといえるのですね」

D 「そうですね。無明・行・愛(愛執)から、形を取っ

て身となり、この身を我として我がものであると深く愛執し

ている。だからさまざま憂苦が起こってくるのです」

A 「たとえばどのような」

D 「まずどこまでも生きのびたい、死にたくない。歳をとりたくない、健康で長生きし

たい。そしてこの身を楽しませたい、安楽にしたい。生きて死なないようにするために

はお金がなくてはならない。損してはならない。生存競争

に負けてはならない。自分の生存を脅かす他者は敵であり、これを排除しなくてはならない。人から馬鹿にされたくない、尊敬されたい。など

A 「なるほど」

D 「こうした有限な肉体としての形ある自分、いわば有限

ないのちへの執着から解放されて、形のないはかりのない

いのちを真実の主体であると覚る。それが涅槃の悟りとい

われ、そういう主体を真如法性の身と仰せられるのではな

いでしょうか。これが浄土に生まれて仏になるといわれる

のではないのでしょうか」

A 「難しいですね、もう少し分かりやすくお話し下さい」

D 「ごくごく卑近なたとえで

云いますと、大きな海(無量寿命)の中に、縁(無明・行)あ

つて大小さまざまな氷山が出来ます。その氷山は海を離

れていませんが、海の水が一つの形を取ったものです。大

海は無限定なかたちのないのち(真如)としますと、(無明・行によつて)その中に限定された形のいのち(氷山)が現れます(生まれ)。やが

てその氷山は崩れます(死に)がまた氷山(生まれ)を作る。

それを何度も何度も繰り返す。私たちの生存もこのよう

な氷山のようなものではないでしょうか。そして他の凍った氷山とぶつかりあつてい

る。しかし、そのもとは大きないのちの海。にもかかわら

ずそれを知らずに限定された氷の山(肉体的な自分)を自分

だと執して止まない。そして氷の山をどこまでも形成して

止まないのを無明・行といつていいのでしょうか。そして

無明・行が消滅すると、氷山は大きな海に融けてもはや再

び氷の山を作らず、大きな広い海(真如)そのものになる。

まあごく卑近なたとえで申しますとこのようなイメージ

かなと私は受けとっています

A 「なぜ無明・行があると心身を形成するのでしょうか」

D 「大いなる無限ないのちを、一応、無量の心と無量の物質

と限定された自我(個我)の心が生まれる、そうするとそこに無量の物質世界におい

て、物質的な要素が必然的に形(肉体的)を取り、個我の

心と物質的(肉体的)なもの

とが一つに結合する(あるいはそのように感受する)、と

理解してみたらどうでしょうか

A 「もともと、心の領域も物質の領域も無量無辺なので

ね。そんな中に、それを小さく限定したのが一つの生存形

体。その生存形体の一つが人間なので

すね。その場合、迷いの心が身体的要素となぜ結合するのでしょうか

D 「分かりません。不思議としか言い様はないです」

A 「猫の心がなぜ猫の身をもつのか、あるいは結合してい

るのかなど、これは不思議なことなの

です

D 「ええ不思議ですね。もつとも、不思議なことはいくら

でもありますが。こうして、いただいた信心は智慧を本質

とする仏心ですから、それによつて無明・行は滅ぼされ、

# 信心夜話

『一蓮院談合録より』(12)

(太字の文が一蓮院秀存師の談合録の言葉です。カッコ内は私の所感)

香樹院師お言葉に、たのめとあるは助かれ、また我が身を助ける助けるの勅命にしたがえと云うことじや。

(南無阿弥陀仏という六字の意味は、南無は「タノメ」、阿弥陀仏は「タスケル」で、南無阿弥陀仏は「タノメ、タスケル」の仰せであると伝統的に説かれてきた。耳に聞こえる南無阿弥陀仏は「タスケルデ、タノメ」の大悲の仰せ。タスケルとは、阿弥陀仏が「我が力ばかりで汝を必ず浄土へ至らしめる」とのこと。タノメとは、それゆえ「どうか我にまかせてくれよ」との大悲の思し召しである。「タノメ」とは「そのままタスケルから心おきなく助かってくれ」とのお心ともいえる。そして、「タスケル」の勅命(おおせ)を聞いて、仰せのままに受けとっていることの他に信心はない。「我をタノメ」の仰せがかけられてなければ、私は私自身をどうしてみようもない。このまま死んでいかねばならず、無窮の闇に滑り込んでいく他はない。煩惱を煩惱とたとえ知っても、その煩惱をなくすことが

出来ない。自分が利己的な人間であると知っても、その利己心を改めることができない。懺悔をしても真の懺悔にはならず、懺悔が少しできてもなお利己心は頑強に残っている。頼みにしている肉体は歳とともに、いな月単位で老いさらばえていく。嘆いても叫んでもそれを止めることが出来ない。しかも私はどこへいくのか。視点を変えてみれば、私は地球にへばりついて地球とともに宇宙を漂っている極めて小さな虫けらのようなものである。そんな私に今ここに「我をたのめ、汝を引き受けて離さないから」と、南無阿弥陀仏と喚びつめに喚んで下さっている。「タスケテヤルデ遠慮ナクタノメ」のお声は実に有難いではないか。

信とは、勅命を聞いて勅命のままに受けとっていること。それがこちら側からいうと弥陀をたのむことになっている。勅命にしたがうというのは「今の汝のままなりで浄土に連れていく」との南無阿弥陀仏の仰せをそのままに受けとること。それが弥陀を憑(たの)んでいることになっている。仏の言葉を受け入れることは実際(じじ)易しいようで難しい。なぜなら自分の考えや思いはまったく頼りにも当てにもならないと身に浸みて感じていることと裏表だからである。仏教の話も聞いて、仏教の教えをどれほど知っていても、その下にあるのは自分の考えであり、「自分の考えは間違いない、確かである」と思っている。だから仏のお言葉を聴いているようで聞いていない。曇鸞大師が「非常の言は常人の耳に入らず」といわれた

のはまさにそれで、仏の言葉は不可思議なる大悲の言葉であって、人間の思いや考えを超えている。仏の言葉を一応聴いてはいるが、自分の持っている常識や教養をこそ頼みにしているから、知らずして仏の言葉をはねつけている。仏の言葉をはねつけてきたのである。謗法(ぼうぼう)闡提(せんたい)の罪とはこのことで、罪悪深重の身とはそういう我が身のことである)

香月院へ、ある同行お尋ね申して云く。弥陀をたのむと云うはどう云うことござりますか。

答え、信心を得ることだぞよ。信心を得るとはどうでござりますか。答え、信心を得ると云うは南無阿弥陀仏の六字の謂れを聞き開く処じやぞよ。問う、南無阿弥陀仏の六字の謂れを聞き開くと云うはどうでござりますか。答え、阿弥陀様がこの悪人女人を助けんとて五劫永劫かからせられ、ご本願ご成就あそばされ、極樂をかまえて十劫(じゅうじやく)晴天(せいてん)から声をからしてよびづめでおいでる。そのお心の知られたことだぞよ。

(南無阿弥陀仏はかりそめにできたものではない。私はまことの親である阿弥陀仏を知らなかったが、阿弥陀仏は私を一人子のように思って下さり、愛して下さり、心配して下さって、私を同じ仏にしたい、助けたいと思し召して、五劫という長い間ご思案下さって、私を仏にする

ために永劫の修行をなさった、それによって私の助かる南無阿弥陀仏になられ、それを私に与えて下さるのである。その与えて下さっている事実が、口に称え現れたもうお念仏である。実際、子育ての最中、子どもの方は親の心を知らず、親のお世話は何とも思わず、少し大きくなると我が力で大きく成ったように思う。子は親の愛情の深いことを知らないけれど、親はそんな子を見捨てずどこまでも愛情を注ぐ。我らは仏を知らず、仏の慈悲の深いことをちっとも知らず、仏のご苦労を無視しているけれども、仏はあきれもせず、見捨ててもせず、どこどこまでも助けたい、助けずにはおれぬと、五劫永劫の願行をなして南無阿弥陀仏となつて喚びつめに喚んで下さっている。そのお声は今我らの口にお念仏の声となつて出て下さり、お知らせ下さる。お念仏の一声には五劫永劫の御恩がこもっている(了)

## 平成24年度御年忌年回表

1	周忌	平成23年	亡
3	回忌	平成22年	亡
7	回忌	平成18年	亡
13	回忌	平成12年	亡
17	回忌	平成8年	亡
23	回忌	平成2年	亡
27	回忌	昭和61年	亡
33	回忌	昭和55年	亡
37	回忌	昭和49年	亡
50	回忌	昭和38年	亡

(23回忌と27回忌をせずに25回忌にいとむ数え方もあります。また50回忌以後は50年ごとになります)